



「ひとを活かす、ものを活かす」

■ PROFILE 創業者：和田庄司

共働作業所『にんじん舎』（就労継続支援B型）【しらいわ農場】

ディセンターにんじん倶楽部（生活介護） にんじん舎トレーニングセンター（生活訓練）5名

■ 事業概要

養鶏（採卵鶏）・自然栽培野菜（じゃがいも・玉ねぎ・さつまいも・白菜・豆・黒米）

バイオマス（バイオディーゼルオイルの精製・販売 ※公道走行しない車両用として）

特殊肥料（完全発酵鶏糞肥料）販売製造業の許可取得

■ 地域の現状

和田氏は元体育教師だったが、地元支援学校の教員不足を補うため、養護教員課程を経て支援学校の教員となった。養護教育に携わるうちに生徒たちの卒業後の居場所がないことに気づき、教員を退職し、倉庫の2階を使って無認可作業所ににんじん舎を開設した。

■ 農福連携をはじめたきっかけ

B型・生活介護・生活訓練の利用者には重度障害者も多く、重労働は難しかった。そのため、事業所としてはコストを下げ、仕事内容を合理化する選択肢しか残らなかった。そこで理念ともつながる「利用可能な資源の有効活用」を実践するため廃棄物を有効活用するバイオマスエネルギー利用にたどり着いた。また通年で作業するために養鶏を導入する際も会津地鶏という固有種にこだわり、食の安全・地域の安心をコンセプトに鶏糞を活かした循環型農業を実践することとなった。



■ 沿革(画期区分)

平成4年（1992）倉庫の二階で無認可作業所「にんじん舎」開所

平成7年（1995）にんじん舎かたひら農場開所

平成8年（1996）デイサービスにんじん倶楽部開所

平成16年（2004）社会福祉法人「にんじん舎の会」設立

福島民友新聞社主催みんゆう環境賞受賞「食品残さを活用した循環型養鶏」

平成17年（2005）小規模授産施設が認められず、無認可作業所となる

平成18年（2006）新エネ導入によるまちづくり支援事業：BDF燃料製造プラント

福島県賃金向上支援事業「もったいないSプロジェクト」

平成19年（2007）就労継続支援B型・生活介護の多機能型事業所となる

平成21年（2009）養蚕組合より下白岩養鶏場建物を寄贈される。

平成22年（2010）生活訓練事業を加えた多機能型事業所になる

平成23年（2011）東日本大震災発生。耕作地、養鶏場が放射能に汚染され全出荷停止

福島なのはな（F-787）プロジェクト

平成26年（2014）バイオガスプラント本格稼働、

食鳥処理施設本格稼働、

太陽光の活用開始

令和2年（2020）にんじん舎かたひら農場の開所にともない、「みんないっしょwith us」を開始

和田氏引退・継承



■ にんじん舎の会のマッチングストーリー

会津地鶏と自家製造飼料

利用者に自然の喜びを知ってもらおうと、循環型農業・養鶏を開始。にんじん舎で導入した鶏は、通常のブロイラーの倍の120日かけて育てられる会津地鶏で、平家の落人の会津に持ち込んだとされ、一般の鶏の半分しか卵を産まないが、野性味のある味の濃い卵を産み、平飼により優れた肉質の鶏である。緑餌や発酵飼料などを使用し、人の口に直接入るはずだった物を自分たちで配合して与えている。

配達の基本「できたて とれたて うみたて」

卵を1パックから配達するというフットワークが個人消費者の共感を呼び、規格外の卵（ハネ卵）も地域の店舗で大切に商品化され、余すところなく活用している。販路を開拓する際には配達ルート上で営業を行うなど、コスト管理意識のもと活動してきた。

販売方法は配達を基本とし、顧客とのコミュニケーションを図り、クレームを受け止め、改善を行い、安全な食に対する啓発も会報紙で行い、利用者との関係性構築と同時に、顧客との信頼関係を同時に構築してきた。



東日本大震災を乗り越えて

直接的な被害がなかったため、震災後2週間だけ閉所した。食の安全に不安を感じる消費者のために専門機関で放射能汚染検査を実施。卵に放射性ヨウ素、セシウムが含まれていないことを確認し、屋内での平飼いに切り替え、畑の飼料を与えないよう対策をとった。BDF、卵、ウインナー、おもちゃなど復興の途上で、必要としている人々のために商品をつくり続けた。

汚染された大地を復興させるために、菜の花を植えて放射性物質を吸着させ搾油するF-787（ふくしま菜の花）プロジェクトの試験区域として耕作地の一部を菜の花畑に転換。露地栽培はハウス栽培に変更、生産した野菜は全て残留放射能の検査を経て販売するなど徹底して安心安全な商品づくりを行った。

レジリエンス力の高い新エネルギー班

東日本大震災の際にはにんじん舎のBDFが有効活用された。その経験をふまえ、太陽光発電と有機質液肥の製造、家畜糞尿を利用したメタン発酵によるバイオガス発電プラントの実用化へ挑戦中である。

にんじん舎のくるくるリサイクル=もったいないプロジェクトへ

もったいない精神を最大限に発揮し、地域で生じた使用済みたばら油を回収し、バイオディーゼル燃料（BDF=生物由来の軽油代替燃料）としてリサイクルしている。2008年時に既に月1,000トンのBDFを精製している。

完全発酵鶏糞肥料も20kg450円で販売し、商店や工場から出る粉類・麺くず・パンくずは発酵飼料に活用している。地震前の鶏舎では、上水道設備がなく、水不足解消のために雨水タンクを設置し、雨水・再生水利用を行い対応した。

震災から事業継承、そしてソーシャルファームをめざして

創業当時より廃棄物の有効活用などコスト削減に努めてきたが、部門構成や業務の選択と集中など体制の見直しを図った。議論の末、採算性が低い農場部門を閉所、和田氏は引退を決意。その後原点に立ち戻って閉所した農場を新たなソーシャルファームとして発展させるべく再出発した。



■ にんじん舎の会のマッチングポイント！

1 マッチングの形態

大量生産・大量消費社会の中で廃棄されるものを資源として有効活用し、社会の中で生きづらさを抱えた障害者を「働く能力をもったチーム」と見做し、もったいない精神を発揮して、様々な商品開発や廃棄物の利活用を独自に発展させた。（※小規模な福祉事業所でバイオマス発電まで発展させた希有な事例）

2 その発展過程

利用者に自然の暮らしの喜びをもたらすことを目的に事業を発展させた。鶏糞を科学的に活かした畑づくりを行い、良質な卵を産むためにカキ殻などを餌として与えられた採卵鶏の糞はチッ素・リン酸・カリ・石灰が含まれ、病気に強くなる肥料として圃場で有効活用されている。また科学的根拠を元に鶏糞を利用し、肥料過多による生育不良を回避している。

3 行政による財政的・人的支援

2008年に国の補助事業として自立支援プロジェクトを実施し、専門家からの助言指導・商品の成分分析・品質管理に取り組んだ。2010年には福島県授産事業支援センターよりアドバイザー派遣事業や福島県農商工連携ファンド、震災後は災害復旧費等国庫補助金の活用し、食肉加工施設等を復活をさせた。



4 農業関係団体・福祉関係団体との連携形態

会津養鶏協会から株式会社社会津地鶏ネットへ。あぶくま支援学校・にんじん舎の鶏糞肥料を利用した花壇で郡山市花壇コンクールで最優秀賞を受賞。サービス管理責任者H氏の奥様の実家（猪苗代）で収穫される有機栽培野菜を販売。卵かけご飯に合うだし醤油を県内の喜多方若喜商店から分けてもらい、福祉事業所団体・きょうされんのTOMO市場（物販サイト）にて販売を行った。

5 マッチングの対象

地域：福島県郡山市

品目：養鶏（卵・廃鶏の食鳥処理・食肉加工品）・バイオマス・復興支援

利用者：知的（支援学校の卒業生など）

6 コーディネーターの育成方法

利用者の労務については、組織内で定期的な話し合いを行い、顧客とのコミュニケーションについては「にんじん舎クレームポスト」を設置し、商品の品質を高めるためにお客様からの声を反映した商品づくりを考えており、投書に対し会報紙で専門家の解説を交えて誠実に意見に向き合っている。

